

ソードアート・オンライン  
～黒の剣士と歌姫  
～

浅田零

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーディナル・スケールの事件から数日、あんなことがあってもオーグマーとオーディナル・スケールの人気は根強く、皆に遊ばれていた。

これは、そんな中で病んでしまった少女と、病まれた少年のお話。

※駄文注意、増えるタグ、無理な方は見ないで下さい。

# 目次

## 本編

プロローグ：オーディナル・スケールの

ある日 | 1

第1話：再開の歌姫 | 6

第2話：仮想世界で加速する想い

12

第3話：悪化する少女達の想い

16

第4話：歌姫の想いと金木犀の剣士

21

第5話：金木犀の剣士と黒の剣士

26

第6話：黒と金の衝突 | 30

第7話：金と歌姫と、それから…

35

## 番外編

絶剣と黒の剣士 | 41

天真爛漫と黒の剣士 | 46

冥界の女神と黒の剣士 | 51

虹雨の舞姫と黒の剣士 | 56

第四の仮想世界の住人と黒の修剣士

60



## 本編

## プロローグ：オーディナル・スケールのある日

最初は、強いなあゝ。としか思わなかった、

興味なんて、これっぽっちも無かった

はず、だった。

私は……その日まで忘れていた、

彼に、助けられていたのを。

ユナ「みんなあゝ、準備はいい？」

プレイヤーA「おお！ユナだ!!今日はついてるぜ！」

プレイヤーB「今日こそMVP貰うぜ!!」

プレイヤーC「今日は私がMVP取るのー！」

キリト「今日は俺一人か……。」

(やっぱり、人が多いな……)

ユナ「……………んんっ、ミュージックスタート！♪」  
(やっとなんか……やっとなんか……やっとなんか……！)

【アインクラッド・迷宮区内】

ユウナ「はあ……はあ……はあ……！」

大型のモンスターが複数追いかけて来ている

ユウナ「っ……………！」

(エイジ……………助けて！)

モンスター達が一斉に止まる

ユウナ「っ……………？」

モンスター達が消えていく

？「大丈夫……か？」

ユウナ「あ、貴方は？」

キリト「俺はキリト、一人で迷宮区に乗り込むのは危ないぞ？」

ユウナ「き、キリトって……………ここ、攻略組の黒の剣士さん……………？」

キリト「ま、まあ、そうだよ」

ユウナ「え、えと……あ、あの……た、助けられてありがとうございます！」  
頭を下げる

キリト「い、いや！た、大した事じゃないから！」

ユウナ「で、でも……」

キリト「とにかく、ここはまだ敵が来る、安全なところまで送るよ」

ユウナ「そ、そんな！」

キリト「俺も今から帰るところだったんだ、一緒に行こう？」

ユウナ「え、えと……じ、じゃあ……お願いします……／／／」

キリト「うん、じゃあ行こう」

それから、キリトとユウナは町に戻った。

キリト「じゃあ、俺はこれで」

歩いていく

ユウナ「か、かつこい……人だったなあ……」

ユウナ「ま、また会えるかな……」

そして彼女は、恋に落ちる

【アインクラッド・広場にて】

ユウナ「ふう……」

「優しい言葉を

あなたがくれた

寂しい時には

抱きしめてくれた」

キリト「……綺麗な声……だな」

微笑む

ユウナ「き、キリトさん!?!?!」

キリト「あ、ごめん、邪魔しちやっただな」

ユウナ「そ、そんな事ないです!」

キリト「あー、それならいいんだけどさ……えっと、その敬語、やめないか?」

ユウナ「え、えっと……わ、わかり……わかった!」

キリト「それで、何時もここで歌ってるのか?」

ユウナ「ここもだけど……色んなところでだよ」

キリト「へえ……じゃあ、またここに来るよ、そしたら、君の声が聴けるだろ?」

ユウナ「ふえ!?!?!」



キリト「駄目、かな？」

ユウナ「う、ううん！ぜ、絶対だよ！」  
そして彼女は、病み出す。

## 第1話：再開の歌姫

【現実世界・オーディナル・スケールにて】

キリト「ふっ!!」

斬りかかり、ボスをこちらに引きつける

キリト「そのあんた！ちよつとだけタンク、頼めるか!」

プレイヤーA「お、おう！任せろ!」

盾を構え、ボスの攻撃を受け止める

キリト「その3人！合図で銃撃頼む!!」

3人のプレイヤー「「あ、ああ!」」

3……

2……

1……

ボスが大剣を振り上げる

キリト「今だ!!撃つてくれ!!!」

3人のプレイヤー「「了解!!」」

3人の一斉掃射

ボスが大きくよろめく

キリト「あんたら、行けるか？」

プレイヤーB「おうよ！」

プレイヤーC「ま、任せて！」

プレイヤーD「行けるぜ！」

3人「「うおおおお!!!」」

一斉に斬りかかる

キリト「つ……………」

一気にボスの元まで走っていく

キリト「せやあああああ!!!」

真つ直ぐ剣を構え、一直線に斬り抜ける

ボス「グアア……………」

消滅する

ユナ「……………ふふ」

キリト「ふう……」

剣を直す

プレイヤーA「あんた！ いい指示だったぜ！ まるで攻略方法が分かってたみたいだったけどな！」

キリト「あ、あはは……それはどうか……」

オーグマーを外そうとした瞬間

ユナ「はーいっ！ 今日のMVPはアナタっ！」

キリトの前に降りてくる

キリト「ユナじゃないか、ありがとう」

微笑む

プレイヤー達「羨ましいなー！」

ユナ「ふふっ♪ MVPを取ったあなたには〜」

キリト「ん？ 何かくれるのか？」

ユナ「私をプレゼント!!」

キリト「……へっ？」

プレイヤー達「ええええええええええええ!!??」

【所変わりALO・キリト達のホーム】

キリト「……って言うことがあったんだよ……」

ソファに座り、苦笑いしながら

エギル「お、おいキリトよ……ほ、本当なのか？」

クライン「ちくしょう!!!何でコイツばかり!!!」

リズ「はあー、まったく……」

(私が居ないと、やっぱりへんなのが付くわね)

シリカ「ううー……ユナまでキリトさんを……」

(これはずつとずつと私が側に居ないとですね……)

リーファ「お兄ちゃんも大変だね……」

(今度オーディナル・スケールをする時は私も行かなきゃだね……)

シノン「それって、いつあったの？」

キリト「ん？ついきさつきだよ」

シノン「そ、そう……」

(やっぱり買ひ物に誘っておけば……しくじったわね)

ユイ「私はその時間はスリープモードでした……」



ヒロイン達「会いに……行く……？」

その瞬間、ホームの扉が開かれる

ユナ「やっほ、キリトっ♪」

## 第2話：仮想世界で加速する想い

キリト「ゆ、ユナ？ どうして？」

ユナ「やだなあ、キリトに会う為にここまで来たんだよっ♪」

キリトに抱きつく

ヒロイン達「なっ!!」

キリト「!/? // //」

ユウキ「『僕の』キリトに触らないでよ!」

少し声を荒らげる

レイン「そうだよ、『私の』キリトくんに触れないで」

まるで、敵を見るかのようにユナを見る

ユナ「ふざけないでよ……私は貴女達よりずっと前にキリトと会っているし、それに、キ

リトは私を助けてくれたの」

抱きしめる力を少し強めながら

キリト「ゆ、ユナ？ 少し痛い……」

ユナ「ふふ……うふふっ♪」



まるで自分のものだと言うように擦り付ける

ユナ「ずつと……ずつとずつとずつと……こうしたかったんだあ……♪」

光のない、虚ろな目で

アスナ「キリトくんとずつと前から会ってる？何言ってるの？私は第一層の攻略前からキリトくんと会ってるんだよ？それにキリトくんは私の事を何度も……何度も何度も何度も何度も助けてくれた……たった一度助けられたくらいで凶々しい……」

キリト「あ、アスナ？ど、どうしたんだ？」

ストレア「あははあ、おもしろい事言うなあ、アスナは、第一層攻略前からキリトと会ってた？私はそれよりも前からシステムの中でキリトを見つけてきたんだよ？」

ユナ「私とキリトの事を何も知らないくせに……」

ますます抱きしめる力が強くなる

キリト「っ……………」

左手をなんとか動かす

キリト「っ……………」

(よし……………行ける……………)

メニューを開き、ログアウトを押す

ヒロイン達「あっ！」

ユナ「……………ふふ」

【現実世界・和人の部屋】

和人「……………」

アミユスフィアを外す

和人「……………皆…どうしちゃったんだ……………」

和人「……………しばらくALLOにはログイン出来ないな……………」

携帯の画面が光る

ユイ「パパ、皆さんが怖いです」

少し泣きそうになりながら

和人「ユイ……………皆がおかしくなったのって何時からかわかるか？」

ユイ「えーっと…今までも少し変な様子はありましたが、パパがユナのお話をしてからより一層酷くなりました……………」

和人「ユナの話……………からか……………」

和人「……………ユイ、ちよつと気晴らしに散歩でも行こうか？」

ユイ「お散歩…ですか？」

和人「ああ、オーグマーを付けければ一緒に居られるだろ？」

ユイ「は、はい！パパ！是非行きましょう！」

和人「ユナやアスナ達の事はそれから考えようか」

ユイ「はい！パパ！」

ユナ「私がどうしたの??キリト？」

和人「ゆ、ユナ!？」

ユナ「ふふふっ♪もう絶対……絶対には逃がさないんだからね……♪」

## 第3話：悪化する少女達の想い

キリトさんがログアウトしました。

それに続きユナも消える

アスナ「チツ……………私もログアウトしてキリトくんの所に行かないと……………」

それに続き続々とログアウトしていく

クライン「キリの字……………」

エギル「どうか生きててくれ……………」

？「ふーん、オレっちのキー坊を奪おうなんてナ……………」

？「はあ……………研究のせいでまたキリトくんを見逃した……………それにしても……………皆諦めれば

良いのに……………」

「私（オレっち）のモノをとるなんて、痛い目見ないといけないみたいね（だナ）」

また2人、歪んだ愛を持った少女達が現れる…

【場所は変わり和人の部屋】

和人「ゆ、ユナ……ど、どうして……? さっきまでALOに……」

ユナ「キリトが居ないあんな世界、いらぬよ……だからキリトを追いかけてきたんだよ。」

和人「お、俺を……?」

ユナ「うんっ! だって好きな人と一緒に居たいって言うのは当たり前でしょ?」

首を傾げ、不思議そうに

和人「で、でも俺にはアスナが……」

ドンツッ! と地面を蹴る音が部屋に響く

ユナ「………んて………」

和人「ユナ……? どうしたんだ?」

ユナ「何で何で何で何で何で!!!」

和人「っ!?!」

少し後退る

ユナ「どーして今私と喋ってるのにあの女の名前が出てくるの!!? 何で? 何でなの!!」

和人「お、落ち着いてくれユナ! 今日のユナは少しおかしいぞ?」

ユナ「私は落ち着いてるよ? それにおかしいのはキリトの方だよ……どうしてあの女の

名前がここに出たの? ねえ、何で?」

和人「そ、それは……アスナは俺にとって大切な人だし……そ、それに……結婚した人なんだ」

ユナ「え……？嘘……だよな？」

和人「嘘なんかじゃない……俺とアスナは結婚してるんだ……わかつただろ？俺はアスナの事を愛……」

ユナ「あは……あはは……あはは……あはははは!!!」

和人「ゆ、ユナ……？」

ユナ「キリト……かわいいそうだね……」

キリトを抱き寄せる

和人「ユナ!?な、何を……」

ユナ「キリトはあの女に騙されてるんだよ。」

和人「な、何言ってる……」

ユナ「キリトは優しいもんね……あんな女でも助けちゃうんだもんね……。」

和人「お、俺は……」

ユナ「それに……あの女がキリトの事をちゃんと助けた事ってある？」

(ふふ……動揺してるキリトかわいい……)

和人「あ、ああ！俺が麻痺毒で動けなくなつて、後もう少しで殺されそうになつた時

に助けてくれた！」

ユナ「それってさ……フレンド登録してたならもつと早く異変に気づけるよね？もし、攻略するのに必要だったから助けに来た、それだけだとしたら？」

和人「それは……は……」

ユナ「……もし、他のみんなも、キリトを利用する為だけに一緒に居たとしたら？」

和人「っ……」

少し涙目になっている

ユナ「私は……心からキリトの事が好き。」

そつと撫でる

和人「ユ……ナ……」

ユナ「SAOの中で私に言ってくれたよね、俺が君の側にいる限り、俺は君を守ってみせる”つて、だからね……キリト。」

和人「……………」

ユナ「今度はさ、私がキリトを守るよ」

微笑む

和人「う……ん……！俺……ユナと一緒に……居る……」

ユナ「そつか、じゃあ……今度こそずっと一緒に、だね？」

歪んだ愛情が、少年を包む



## 第4話：歌姫の想いと金木犀の剣士

あれから数日…

俺は、ユナと一緒に居る時間がとても安らいで、落ち着いて……でも、何か寂しい気もしていた

そして…

和人「……今ユナはスリープモードか……」

1人ベッドに腰掛け

和人「……」

アミユスフィアを見る

和人「久しぶりに……ログインしてみるか……」

アミユスフィアを手に取る

そして頭に装着し起動させる

和人「……リンクスタート」

慣れたように《OK》とコマンドを押していく

【それから少し経ち……】

ユナ「キリト〜！ごめんね〜、寂しか…った….:….:….:….:….:….:….:」

ベッドで横になり、意識のない少年を見つめる

ユナ「….:….:あの世界は危険がいっぱいだから、行っちゃダメだって行つたのに….:….:」

何で何で何で何で何で何で何で何で何でナンデナンデナンデナンデナン  
デ!!!

やっぱり….:….:ALLOのデータを初期化して、入れないようにしないとね

【空都ライン】

キリト「….:….:」

キャラクターが構成され、和人の意識がキリトに覚醒する

キリト「ふう….:….:」

手を握ったり、周りを見たりする

キリト「久しぶりだな….:この感覚」

それから少しタウンを歩いていると….:….:

そこには見慣れないクエスト掲示板があった

キリト「何だこれ….:….:?」

近づくtoプレイヤーに止められる

プレイヤー「あんた、このクエスト受けるのか?」

キリト「あ、ああ、そのつもりだけど……」

プレイヤー「やめときなやめときな、あんなのクリア出来るわけねえーよ」

キリト「クリア出来ない？ そんなに難しいのか？」

プレイヤー「いや、クエスト自体は浮島草原ヴォークリンデに行つて素材を採つてくるだけだ」

キリト「……？ だったら簡単じゃ……」

プレイヤー「それがそこで出てくるNPCがとんでもねえ強さなんだ」

キリト「へえ……そんなに強いのか」

プレイヤー「ああ、何でも『違う、お前ではない……』とか言いながら見たこともないスキルを使つてくるそうだし」

キリト「見たこともないスキル……どんな感じかわかるか？」

プレイヤー「えーつとな……『……舞え、花たち』つて言つた途端刀身が消えて、辺りに金木犀の匂いがするらしい……」

キリト「金木犀……の……」

プレイヤー「そして気がつけばHPがゼロ、だそうだ」

キリト「……尚更興味が出てきた」

少しニヤツと笑いクエストを受ける

【浮島草原ヴォークリンデ】

キリト「確か……ここら辺だったよな」

飛行状態から降下し、地面に足をつける

キリト「あれ……か……？」

キリトが見た先には、風に揺られとても美しい金色に伸びた髪に、澄んだ蒼色の瞳、そしてその容姿には似合わないゴツゴツとした黄金の鎧

そんな少女が金色の剣を地面に刺し、じっと何かを待つかのように立っていた

キリト「近づいてみるか……」

歩き出し、少女に近づく

すると

？「……………」

何かに気がついたかのように剣を取り、こちらに向かってくる

キリト「……………」

(いきなり来るか……)

ユナイティィーウォークスの柄に手をかけ構える

すると……

？「ようやく見つけました！キリト!!」

地面に押し倒す勢いで抱きつく  
キリト「……へっ!？」

## 第5話：金木犀の剣士と黒の剣士

？「ああ……………やつと……………やつと会えました……………ふふふつ……………」

抱きつき地面に押し倒し、そのまま擦り付けるかのようにすりすりしてる

キリト「ちよ、ちよつと待ってくれ！き、君は一体……………!？」

（ま、まさか男性スプリガンにのみこういう反応をするイベント…？でもNPCなのに俺のプレイヤーネームを…一体どうなってるんだ……………?）

？「ふふふつ……………キリトお……………好きです……………いえ、愛していますう……………」

顔をキリトの胸にうづくめながら

キリト「なつ……………!?!?!」

？「ああ……………少し照れた顔も愛おしい……………」

右手をキリトの顔にそつと添える

キリト「つ……………// // //」

（くそ……………ど、どうしたら……………!?!）

？「ふふつ……………焦っている顔も実に美しいです……………」

キリト「つ……………// //」

キリト「そ、そうだ、一体君は何者なんだ？」

？「あつ…私とした事がすいません…今は」まだ「出会ったことの無い時代ですよ  
ね」

1度離れ、微笑みかける

キリト「今は…まだ…？」

？「私はアリス・シンセシス・サーテイ…貴方の妻です。」

また抱きつく

キリト「つ、妻!？」

？「新しいクエストの真実の為にここまで来たケド……ふーん……アレは始末しないといけないナ……」

何処までも深く暗い瞳が、金木犀の剣士と黒の剣士を見つめる

【現実世界・結城明日奈の家】

明日奈「キリトくん……」

あれから数日…

一体何処に行っちゃったの、キリトくん……？

明日奈「……まさか」

ユナや他の雌共にかかされてるんじゃないや……

電話にも出てくれないし……

明日奈の握り締めているスマートフォンには……

1時00分：キリトくん一体何処にいるの？

1時00分：ねえ、キリトくん??

1時01分：あれから○日と3時間23分50秒経つよ？

1時01分：ねえ……お願いだよ……

1時02分：キリトくんキリトくんキリトくん

1時03分：キリトくんキリトくんキリトくん

・  
・  
・

というメールが何万件と送られていた

【現実世界・紺野木綿季の家】

木綿季「……………」

部屋には壁、天井、ベッド等全ての物の色は黒で統一されており、そしてそれぞれ1



面ビツシリとキリト（桐ヶ谷和人）の写真が貼られている

木綿季「キリトお……」

手に持っている写真には、恐らく全員で撮った記念写真だと思われるが、自身とキリト以外全て塗り潰されている

木綿季「どこ行っちゃったのお……キリトお……」

【ALO内・浮島草原ヴォークリンデ】

キリト「つ、つまり君は未来から……来た？」

アリス「はい、そうとってもらって構いません。」

キリト「それは良いんだけどさ……どうして君は……その……俺の……妻なんだ？」

アリス「そんなの会った時から決まっている事ではありませんか、ふふつ……面白い事を言いますね、キリト。」

キリト「……」

アリス「むう……では、こうしましょう、今から私とでゆえる？なる物をしましょう。」

キリト「デュエル……？何でまた……」

アリス「キリト、貴方が勝てば妻という事は撤回します、しかし、私が勝てば……」

キリト「……勝てば……？」

アリス「貴方を貰います。」

## 第6話：黒と金の衝突

キリト「デュエルって……《完全決着モード》と《半減決着モード》、《初撃決着モード》のどれにするんだ？」

アリス「そうですね…手短に終わらせられるのはどれですか？」

キリト「まあ……早く終わるのは《初撃決着モード》か、《半減決着モード》かな」  
アリス「では、《半減決着モード》にしましょう。」

キリト「わ、わかった……」

メニュー画面を開き、アリスにデュエルの招待をする

アリス「これは……？」

キリト「えーっと……受けるって言うのを押してくれ」

アリス「わかりました。」

言われた通り押す

『デュエル準備中』

○キリトVSアリス○

《半減決着モード》

90……

【キリトside】

キリト「……。」

ユナイティードウオックスを構える

50……

キリト「さて……」

(相手がどう動くかわからない以上……下手に油断出来ないな……仕方ない……使うか……)

ディバイネーションに手をかけ、構える

10……

キリト「……」

(まずは距離をとって、とりあえずダブル・サーキュラーで動きを見るか……)

『スタート』

キリト「よつと……」

大きく後ろに飛び引く

【アリスside】

アリス「……。」

金木犀の剣を構える

50……

アリス「……。」

(ああ……凜として、そして美しくもあり……何よりも愛おしい……このでゆえる？に勝てば最早キリトは私のモノ……)

10……

アリス「ふふ……」

(もうすぐで……私のモノに……)

『スタート』

キリト「よつと……」

大きく後ろに飛び引く

が……

アリス「……」

物凄い勢いで迫ってくる

キリト「なっ……!?!」

(は、速い……!?!)

アリス「……して……」

何かを言いながら斬り掛かる

キリト「っ!!」

(重すぎるっ!?)

クロス・ブロックで受け止める

アリス「どうして……何故です!？」

更に斬り掛かる

キリト「っ!？」

防御が間に合わず吹き飛ぶ

アリス「今……逃げようとなりましたよね……」

ゆらゆらと歩きながら近づく

キリト「っ……」

(一撃でこれだけ削られるなら……もうこれ以上くらえないな……くそ……)

アリス「ふふ……だったらその私から逃げる足は要りませんよね？」

キリト「っ……ここだっ!」

周りに黒い煙幕の様なものを放つ

アリス「これは……」

キリト「……」

(この娘には悪いけど……)

2本両方にソードスキルを溜める

アリス「ふふ……」

金木犀の剣を両手で自身の目の前に持つ

キリト「スターバースト……」

駆け寄って初撃の2連を“何か”に阻まれる

キリト「っ!?!」

周りには金木犀の花が舞っている

アリス「“武装解放”リリース・リコレクション」

全方位からの攻撃を仕掛ける

キリト「ま、まずい……!」

まともにくろう

そして、キリトのHPは25%まで減る

『勝者・アリス』

アリス「ふふ……キリト……私の勝ちですよ」

何処までも濁った瞳の少女は、黒き少年を見つめる

## 第7話：金と歌姫と、それから…

アリス「と言った具合に、私達の世界、アンダーワールドを救ってくれたのですよ、キリト。」

ギユツと腕を抱きしめる

キリト「そ、そう…か…」

あの時、彼女の未知なスキルによって敗北した俺は、休める場所に行きたいと言われ、一緒にタウンに来た後、この様にずっと腕を絡められ、未来の俺の活躍をずっと話されていた。

ああ…どうしてこうなった…

アリス「それからですね、キ…」

??「何、してるのかな？キリト…」

キリト「っ…!?!」

全身から汗が出るような、そして底知れない怒りが含まれた声で後ろから呼ばれ、ゆっくり振り返る。

そこには…

ユナ「もうこの世界に来ちゃダメだって、私、言ったよね？」

光の無い瞳で、こちらをじっと見つめるユナが居た。

キリト「ゆ、ユナ：!?!ど、どうして…」

アリス「何者だ、貴様。」

キツ、と威嚇するように睨みつける

ユナ「そつちこそ、誰かな？」

お前こそ、と言うように睨みつける

アリス「ふん、いきなり出てきて、私のキリトを怯えさせる様な者に名乗る名など無い。」

ユナ「私の…?笑わせないでよ、キリトは私のなの!」

アリス「キリトはお前のものなどでは無い!それに見たところ、どうやらキリトは貴様の事を怖がっている様子、そんな貴様にキリトの近くに居る資格はあるのか?」

ユナ「怯えてる?証拠も無いのに勝手なこと言わないでよ、第一、少し様子を見させてもらってたけど、さつきからあなたが話してる間、キリトはずっと居ずらそうに、離れたそうにしてたよ?」



アリス「貴様…ッ！」

腰辺りに納刀された、劍の柄を掴む

キリト「ふ、2人とも、そこら辺に…」

2人の仲裁に入る為に、止めようとするが…

ユナ「大丈夫だよ、キリト」

優しく微笑みかける

ユナ「この女黙らせたら、すぐに2人きりになれるから、ね？」

アリス「ふん、黙るのは貴様だ。」

今にでも決闘が始まりそうな雰囲気に含まれる。

が、しかしその時、

??「こつち！」

キリト「え…うわっ!？」

物凄い速さで連れていかれる

アリス「っ!？」

ユナ「キリト!!」

【連れ去られた後・路地裏】

?? 「ふう、やっと会えたあ〜」

キリト 「い、いきなり誰……って、ユウキ？」

ユウキ 「えへへ、お久しぶりだね、キリト」

キリト 「あ、あー…確かにそうだ、な…」

バツが悪そうに、少し頬をかく

ユウキ 「でき、なんで連絡一つしてくれなかったの？」

少し首を傾げる

キリト 「え、えーつと…す、少しリアルが忙しくてさ」

あははー、と目を逸らしながら

ユウキ 「ふーん……」

少し、近づくと

キリト 「ゆ、ユウキ……？」

ユウキ 「それ嘘、だよね」

顔を覗き込む

キリト 「っ……！」

ユウキ 「……まあいいよ、ボクはそれでキリトを責めたりしないし、んー……まあ確か

に寂しかったけど、どうせあの雌……ユナ、だっけ？が、自分勝手にキリトの事を縛り付けたりしてたんでしょ？例えば、あの世界は危険がいっぱい、とか言つてさ。でも安心してキリト、ボクはそんな風にキリトを縛り付けたりしないし、無理強いだつてしない、お互いが信頼し合える関係だもんね？けど、連絡くらいして欲しかったなあ、ボクずつと待つてたんだよ？ALOでもリアルでも、もしかしたら来てくれるかもつて……ああでもそつか、あの女が使えない様にしてたら出来ないよね……やつぱりキリトは悪くないんだ、全部あの女や、アスナや、みんなが悪いんだよね？やつぱりこんなことならアスナじゃなくキリトにギルドに入つてもらつてボクが管理すれば良かった……でもこれからずつと傍に居ればいい、よね？そうと決まればずつと一緒に居てくれるよね、キリト」

暗い瞳で瞬きもせず、こちらをじつと見つめながら

キリト「ひっ……」

後ろに下がるが、壁にぶつかる

ユウキ「今、逃げようとしたよね、キリト」

ドンツ！、と壁に手を付き、所謂壁ドン状態になる

キリト「ち、違……」

ユウキ「違わないよ、はあ……本当はしたくないけど……」

そつと抱きしめる  
ユウキ「お・し・お・き、  
しなきや、  
ね…？」

## 番外編

## 絶剣と黒の剣士

僕はキリトの事、最初はとっても強い人だなあーって、でも、その時はまだアスナの事が好きだったんだ

それからちよつと経って、スリーピンググナイツの皆と、迷宮区に来てた時なんだ

ユウキ「あれ……？はぐれちゃった??」

きよろきよろ、と周りを見る

大量のモンスターが出現する

ユウキ「っ！」

剣を抜く

ユウキ「やあっ!!」

ソードスキル、レイジ・スパイクを発動、複数のモンスターを貫いていく

ユウキ「これくらいなら行ける！」

構え直す

しかし増え続けるモンスター

それから少し経ち…

ユウキ「はあ……はあ……」

(やばい……かも……)

ユウキ「……っ」

(こんな時……皆が居てくれたらなあ……)

モンスター達が一斉に攻撃を仕掛けてくる

が……

? 「はあっ!!」

ソードスキル、ヴォーパルストライクを発動させ、ユウキの周囲のモンスターを貫く

ユウキ「キ……リト……?」

キリト「やつと見つけた…全く、探したぞユウキ」

ユウキ「え……?」

キリト「スリーピングナイトのみんなとアスナから頼まれてさ、ユウキが圏外に居

るみたいだから一緒に探して”ってな」

ユウキ「あ、あり……がどう……」

モンスター達が攻撃を仕掛けてくる

キリト「つと」

受け止める

キリト「まだやれるか？ユウキ」

ユウキ「…うん！もちろん！！」

構える

キリト「よし、行くぞ！！」

ユウキ「おっけー！！」

数分後……………

ユウキ「ふーっ！終わったあ〜」

キリト「お疲れユウキ、ナイスファイトだったぜ」

ユナイティードークスを直す

ユウキ「キリトこそ！」

マクアフィテルを直す

キリト「いやあー、戦った戦った〜」

両手を上にあげ、伸びをしながら

ユウキ「やっぱりキリトと一緒に戦うのは楽しいね！」

キリトの手を握り

キリト「お、おお……そうだな」

微笑む

ユウキ「えへへっ！」

(……こんなんなら、アスナじゃなくてキリトを誘えばよかったなあ……)

キリト「ん？ユウキ……どうした？」

ユウキ「……ううん！何でもないよ！それよりも早くタウンに戻ろうよ！」

キリト「そうだな、みんな心配してるしな」

ユウキ「……みんなはどうでもいいんだけどな……」

小声でぼそぼそと呟く

キリト「ん……？どうした？大丈夫か？」

ユウキ「……だ、大丈夫だよ！さっ、行こっ！」

キリトと手を恋人繋ぎで繋ぐ

キリト「ゆ、ユウキ？／＼／＼」

ユウキ「えへへっ！／＼／＼」

(キリトはアスナに毒されてるから……僕が綺麗にしてあげないと……)



それからずっと、ずっとずっとずうーっと、キリトがクエスト行く時も、アイテムを  
買いに行く時も、武器を修理しに行く時、何時でも何をする時もずっと一緒に居たんだ  
よっ♪

キリトってほんとに可愛いんだよね、ちよつとした事でも照れちやつてさっ♪

だからね

大好きだよ

キリト

## 天真爛漫と黒の剣士

「アインクラッド10層タウンにて」

キリト「んー……」

（10層のボス前にとりあえずアイテム補充でもしておこうかな）

アイテム屋で回復アイテムなどを見てる

「可愛いなあ〜」

キリト「あ、すみません」

（今…何か聞こえたような……？）

店員「はい、どれにしますか？」

キリト「んー、ポーション5つと転移結晶2つ貰おうかな」

店員「了解致しました。」

「私のモノになってくれればなあ〜」

キリト「ん……？」

店員「ありがとうございます！」

お辞儀する

キリト「あ、ありがとう……」  
歩いていく

あれから時は流れ……

【タウンにて】

キリト「……」

（誰かの気配……俺をつけてきているのか……？）

歩いてその場から移動する

「えへ……えへへ……かつこいい……よお……キリトお……」

キリト「……」

（まだ気配がする……そうだ……）

歩いてその場から移動、路地裏の様な所に

「えへへ……」

キリト「……」

（この距離でも気配しか感じ取れない……かけてみるか）

キリト「……誰だ」

振り返る

「あーあ、バレちゃったかあ〜」

キリト「……」

(この声……どこかで……)

ストレア「こんにちは、キリト」

これが私と彼(キリト)の出会いだったんだ〜

本当に嬉しかったんだよ?だって、生で彼を見ることが出来て、感じる事が出来て、それに愛することが出来るんだよ?そりゃあ嬉しいよ!

【ある日のALO・タウンにて】

ストレア「……」

(確か最近キリトってここの道よく通るんだよね)

しばらく待つと

キリト「……」

(くっそ〜、アルゴめえ…『情報収集のためダ、キー坊にも手伝って貰うゾ』とか言ってる人こき使いやがって…まあ良いんだけどさ……)

歩いている

ストレア「…あ、キリト〜!」

抱きつく

キリト「うわあっ!?す、ストレア!?!／／／」

ストレア「えっへへへ、キリト成分補充♪」

キリト「す、ストレア!は、離れてくれ!そ、その…あ、当たって…／／／」

ストレア「んもお、当てるんだよ♪」

そう言いすりすり擦り付けながら

キリト「っ……／／／」

ストレア「ふふ……」

(照れちゃってる…可愛いなあ…うん?)

キリト「す、ストレア?どうしたんだ?」

ストレア「ねえ…キリト?どうしてキリトからあの情報屋の匂いがするのかな?なん

で?なんでなの?」

キリト「お、落ち着いてくれストレア!さっきアルゴに情報収集の手伝いを頼まれた

んだ!」

ストレア「でも情報収集ならくつつきながらする必要無いよね、ねえキリト、浮気?」

キリト「う、浮気って…っ、付き合っていない……」

(それにどうしてアルゴが抱きついてきてそのままだったのを知って……?)

ストレア「まあ良いよ…私は優しいからね、でもねキリト、約束だよ…」

キリト「や、約束…?」

ストレア「ずつと…一緒に居てね? 破ったら…私無しじゃ生きられないようにするからね」

目の光りが消え、虚ろな目で微笑む

キリト「っ!? わ、わかった!」

ストレア「…ふつ♪もうキリトったら怖がつちやつてく、可愛いなあ」

またすりすりと、今度は自分のものだと言うように擦り付ける

あの約束、破らないでね…キリト

# 冥界の女神と黒の剣士

初めは、ただ彼の……キリトの強さが知りたいただけだった。

そりや……男性なのに女性のフリして私を騙してたのは正直許せないと思ってたけど……でも、あの世界（GGO）で彼と出会えた事は、本当に良かったと思えるわ。

だって、キリトは……

私を唯一理解してくれて、愛してくれる人だからね

【ALO・環状氷山フロスヒルデ】

キリト「なあシノン、なんでまた今日は氷山なんだ？」

シノン「クエストよ、クエスト」

キリト「クエスト？どんな内容なんだ？」

シノン「飛行型のモンスターを数十匹倒す、だったかしら」

キリト「……？だったらシノン一人でも十分じゃ……」

シノン「クエスト受託条件が二人」で“攻略しないとイケないのよ”

キリト「あ……だから暇そうな俺へ頼んだと」

シノン「そういう事。」

（嘘、本当はそんな条件ない……ただあんたと居たいだけ）

キリト「お、シノン、あそこに沢山いるぜ」

シノン「ええ、ざっと見た感じあそこにいるやつらで足りそうね」

キリト「うしっ！やるかー！」

ユナイテীবウオクスを構える

シノン「ほんとあんたって戦闘になると楽しそうに笑うわよね……」

（まあそこも愛してるんだけど……）

アツキヌフオートを構える

キリト「じゃあシノン、援護よろしく」

一気に飛び、敵の元まで行く

シノン「任せて」

（あんたの事は、私しか守れないものね……）

矢を構える

【数十分後……】

キリト「ふう……」

ユナイテীবウオクスを直す

シノン「えーつと……」



クエスト情報を確認してる

シノン「うん、丁度終わってるわね」

メニュー画面を消す

キリト「おつかれ、シノン」

シノン「ええ、お疲れ様、キリト」

【タウンにて】

キリト「この後はどうするんだ？何も無いなら俺はログアウトするけど……」

シノン「……そ、その……」

キリト「……ん？どうした？」

シノン「リアルでお茶しない……？」

キリト「り、リアルで？」

シノン「きよ、今日のお礼って事でさ」

キリト「……まあ……そういう事なら良いぜ、どこの店にするんだ？」

シノン「お、お店じゃなくて……私の家……で……」

キリト「し、シノンの家で？」

シノン「駄目……かしら？」

キリト「シノンの方こそ嫌じゃないのか？アスナ達みたいなの女子じゃなくて男の俺

を家へあげるなんて」

シノン「……………どうして今他の女共の名前を……」

俯き、小声で呟く

キリト「……………？シノン……………？」

シノン「……………ううん、何でもないわ、そんな事よりその所は気にしないで、あんたの事は私は信用してる、家へ入れる理由としては充分だと思っただけ？」

キリト「ま、まあ……………そ、そうだけだよ」

シノン「それとも……………他のことでもしたくなかった？」

キリトの右頬に手を添えて

キリト「っ!?!／／」

シノン「……………ふふっ、なーんてね、ほんとあんたって面白い反応するわね」

キリト「し、シノンが変な事言うからだよ／／」

シノン「はいはい、それじゃあ、待ってるからね」

キリト「あ、ああ……………」

私ね、キリト。

GGOの時も、ううん、それ以外の時だって、貴方と居られてほんとに嬉しかったの

よ？

だから、私は貴方と居たいからALOにログインした…  
でも、ALOでは私の居場所なんて無かった…

それでもキリト、貴方は…

私を愛してくれるよね？

だってキリトは私を唯一理解してくれる人

だもんね？

## 虹雨の舞姫と黒の剣士

今日は皆に、私の彼（キリト）のお話をするねっ♪

まず最初にキリトくんはね、かっこいいし可愛いし愛でたくなるし、とにかく最高のんだっ！

普段はしっかりしてるけど、ちょつと抱きしめてあげるだけで顔が真っ赤になってじたばたするんだ

【ALO内・タウンにて】

レイン「やつほー、キリトくん、1人なんて珍しいね」

手を振り、歩いて来る

キリト「やあ、レイン、今ログインした所だったんだ」

レイン「あ、なるほど」

（本当は知ってたよ、ずっと見てたんだから）

レイン「じゃあ今暇かな?」

キリト「んー、まあこれからアスナとかと合流しようかと思ってた所だし、暇と言え

ば暇かな」

レイン「そっかあ〜!」

(絶対他の女の所には行かせないよ)

レイン「それならさ、一緒にパーティ組んでダンジョン行かない?」

キリト「ダンジョンに? 良いけど、珍しいな、レインが自分からパーティ組もうなんて言うのは」

レイン「それはお互い様じゃないかな?」

キリト「あはは…まあそうだな」

レイン「それで、行つてくれる?」

キリト「ああ、良いぜ、ソロプレイヤー同士での狩りも悪くないしな」

レイン「やったあ〜! ありがとう! キリトくんっ♪」

【ダンジョン内部】

レイン「結構奥まで来たね〜」

キリト「ああ、ここまで来るのソロだと割とキツかったけど、2人なら余裕だな」

レイン「ふふん♪キリトくんの背中は、レインちゃんにおまかせあれ〜♪」

キリト「それじゃあ、俺はレインの事を守ろうかな」

微笑みかける

レイン「ふふっ♪じゃあ頼むよく、キリトくんっ！」

(ずつと……ずつとずつとずうつと一緒だよ……)

ソード・オブ・ホグニを2本構え、周りの敵を倒していく

キリト「おう、任せてくれ！」

微笑みかけ、ユナイティウオークスとデイバイネーションを構え、周りを一掃する

レイン「ふう〜、やっぱりキリトくんと一緒だと楽しいなあ〜」

ソード・オブ・ホグニ×2本を直す

キリト「俺もレインと一緒にだと楽しいよ」

ユナイティウオークスとデイバイネーションを直す

レイン「さーてと、そろそろタウンに戻る？」

キリト「んー、そうだな、アスナ達も待つてるだろうし…」

レイン「………そ、そうだ！もう少し先に行かない？」

キリト「ん？戻るんじゃないのか？」

レイン「もう少し進んだらレアモンスターが出現するらしいし、なんでもドロップ品に片手剣があるらしいんだ！だから行ってみたい？」

キリト「いつの間にかレアモンスターなんて……まあでも折角ここまで来たんだし、行

くか」

レイン「うんっ！そうこなくちやねっ♪」

抱きつき、胸を押し当てる

キリト「うおっ!?!れ、レイン!?!／／／／」

レイン「えへへっ…レアモンスター<sup>の</sup>所まではこのまま行こ?／／／」

キリト「いや…で、でも…」

レイン「誰も見てないんだし、いいじゃん♪」

すりすり、と押しつける

キリト「わ、わかったよ／／／／」

ね、キリトくんだったらほんと可愛いでしょ??

あー、ほんとに、私だけのものになればいいのにな

まあいづれ、そうしてみせるけどね。

## 第四の仮想世界の住人と黒の修剣士

アンダーワールド内部

【時刻・午前3時40分】

突然ですがこんにちわ、ロニエ・アラベルです！

こんな時間から何をするか、ですか？

それはですね…

ロニエ「……」キョロキョロ

周りを確認している

ロニエ「……よし、行ける」

部屋に入る

そう！日課の先輩（キリト）の寝顔を見に来たんです！

知ってますか？先輩って普段はかっこよくて、笑顔も素敵で、凛としてたりするんですけど、寝てる時もそれはもうより一層最高で！女の子かなって思うくらい華奢で、寝



返りするときも手をギュツとしてたり、頬をつついたりすると優しく握ってくれたりして本つつつ当に可愛くて尊いんです！しかも！偶に魘されてる時があるんですけど、その時も手を握ると両手で握ってくれて、安心した寝顔になったりするんです！！あ、でも魘されてる時に「サチ…」とか「アスナ…」とか、他にもいろいろ名前を言ってたよ  
うな……一体どこの雌豚なんですかね？私の先輩を脅かそうとするやつは全部私が  
……

ハッ！いけないいけない、早く先輩成分を摂取しないと……

ロニエ「……」

そつと寝ているキリトのベッドに近寄り、首元に顔を寄せる。

ロニエ「……っ！」

深呼吸してる

ロニエ「っ……はあ……はあ……／＼／＼」

少し汗ばんだ匂い……また遅くまでお稽古してたのかな……でも……やっぱりこの匂い  
い堪んない……／＼／＼

ロニエ「……」ペロッ

首筋を舐める

ちよつとしよつぱくて…これも堪んない…//

ロニエ「ふう……」

キリトの顔を見る

キリト「すう……すう……」

静かに寝息をたてている

ロニエ「……」

優しくキスをする

キリト「んう……」

数分後…

ロニエ「ふう……」

(これで今日一日頑張れる！)

ロニエ「それじゃ先輩、また来ます。」

また、明日も

その次の日も

ずっと

ずっと

ずうくと

一緒ですよ、先輩。

【次の日】

キリト「はっ!!」

自分の剣をぶつけ相手の剣を払い除ける

リーナ「ほう……面白。」

1歩下がる

キリト「……!」

(……だッ!)

シャープ・ネイルの構えを取る。

リーナ「だが……」

そこにソルティリーナの姿は無い

キリト「なっ!？」

リーナ「詰めが甘いぞ、キリト」

背後を取られている

キリト「……参りました……」

その場に座る

リーナ「ふふ、それでは、何をお願いしようか」

キリト「あんまり大したことは出来ませんよ？」

リーナ「なに、ただ少し、付き合っつて、貰うだけさ」

キリト「付き合う？ 買い物か何かの付き添いですか？」

リーナ「まあ、その時のお楽しみさ、それより……」

白いハンカチを出す

リーナ「汗をかいただろう？ これで拭くといい」

そう言っつてキリトに差し出す

キリト「いや、そんなの悪いですよ」

リーナ「遠慮することは無い、さあ、早く。」

キリト「いや、でも……」

リーナ「良いから、拭くんだ。」

キリト「じ、じゃあ、遠慮なく…」  
額等を拭く

リーナ「特に『首筋』や『口元』などはしっかりと拭いておくように」  
キリト「わ、わかりました」

リーナ「……」

あの傍付きめ…キリトにはバレて無いかもしれんが、臭いでわかるぞ…私のキリトを汚したな…キリトに免じて見逃していたが…

少し痛い目を見ないといけない様だな。

安心しろ、キリト。

お前は私が絶対に守ってやるからな。

だから

絶対

逃がさない。